

2015年(平成27年)9月10日発行

発行者:大阪府釣りインストラクター連絡機構 本部:大阪府東大阪市中小阪1-5-20 tel06-6729-9485 fax06-6729-9457 (編集責任者:広報部萱間)

市民ボランティアの危機的時代に

来田 仁成 (大阪府釣りインストラクター機構代表)

JOFI大阪会員のみならず、平成27年度も、様々な事業にご協力いただき深く感謝しています。

猛暑に続く連続台風の襲来、そしてエルニーニョの影響による秋雨前線の停滞と天候異変が続きます。

国の水産や環境政策もまた、瀬戸内海の実情などに関する研究に携わっておられる先生方に、最新の知識をご披露頂くべく現在ご依頼を進めています。また、遊漁船を含めて釣り場での事故に関連する最新情報等も用意しました。

一方で、3年前から取り組んできた水産庁の「水産多面的機能発

揮事業」については、漁村文化の継承とのメインテーマのもとに、水産基本計画に打ち出されている「都市住民と漁村文化の交流」を目標としてわたしたちも多大のエネルギーを費やして協力してきました。

この多面的機能発揮事業については、発足当初に掲げられた理想に基づき、わたしたちの大阪において、そのモデルケースをとの心意気で取り組んだ試みでしたが、まことに残念なことに、その制度そのものの本質が、監査機関等の解釈の変化等によって、年と共に変質したと推察され、単なる漁業組合への助成事業と化そうとしております。

中央機関のこうした解釈のずれは、近年しばしばみられることとはいえ、行政の掲げる目標を共に話し合い、共通項を模索しながら積極的に協力していくという全釣り協の基本的姿勢から見た場合、ある意味で情動的に裏切られたとの思いが蓄積してくるのもやむないことではないかと思っています。

しかし、いかなる状況が出来しようとも、失われていく自然環境や、人々の心の通い合いの理想の姿を見失うことなく、穏やかな心を保ちながら協力していくという、素朴な釣り人の姿勢を貫くことこそ、公認釣りインストラクターのみなさんに求められる姿勢ではないかとも思っています。

行政や自治体には、それぞれその時、それなりの事情や変化も当然でしょうが、釣り人のリーダーたるもの、そうした変化とは関係なく、釣りのできる環境の保全に向けてひたすら歩み続ける姿を保ち続けることこそ、ある意味で世の中の変化、変動に対する警鐘となり得るのではないかと考えている次第です。

さて、来る12月5、6日には、大阪で久しぶりに

「フィッシングマスター資格講習会、資格試験」が開催されます。

今回は海の問題や内水面の諸問題、さらには大阪湾・瀬戸内海の実情などに関する研究に携わっておられる先生方に、最新の知識をご披露頂くべく現在ご依頼を進めています。また、遊漁船を含めて釣り場での事故に関連する最新情報等も用意しました。

マスター未取得の方々にはぜひご参加頂くとともに、既取得のみなさんの研修会を兼ねた講義でもありますので、ぜひご聴講いただくようにお願いします。

プログラム等詳細につきましてはJOFI大阪ホームページで発表させていただきます。



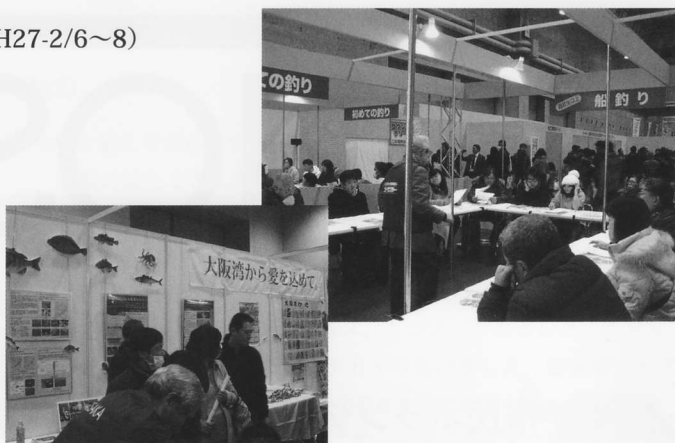
藻場保全 アマモ場を増やす活動
種苗放流 稚魚を放流し資源を維持する活動
漂着物回収 自然海岸から漂着ゴミを取り除く活動
漁村文化継承 大阪湾の里海文化を活性化する活動

豊かな大阪湾をつくる会 (協賛団体: 釣り文化協会、大阪湾見守りネット、JOFI大阪、WFS、世大漁漁業を愛する釣り人の会、下庄漁業協同組合、高島臨海漁協同組合、尾道漁業協同組合)

報告1

2015 フィッシングショー OSAKA (H27-2/6~8)

フィッシングショー大阪は2月6日から開催、3日間で53,058名もの入場者があり、私たちも「船釣り教室」「波止釣り教室」「放流募金活動」「大阪府海域美化安全協会（大阪湾の環境）」の各ブースに分かれ活躍しました。毎年のことですが、「釣り教室」は開場と同時に長蛇の列となる盛況振りでした。大釣協のブースでは子供達がエビ釣りに歓声を上げていました。海域美化安全協会の「魚カンパッチ作り」では、2日間で850個以上の作成があり腕が痛くなるほど忙しかったとのこと。フィッシングショーという機会を通じて、マナーやルール、環境の知識を併せて持っていただくことや、釣り具業界との交流が続くように願います。（物部）



報告2

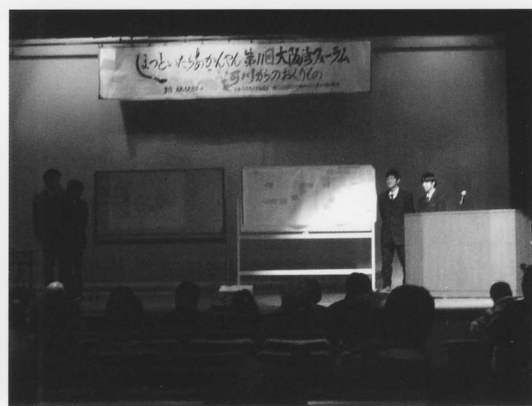
大阪湾フォーラム「河川からのおくりもの」(H27-3/15)

第11回大阪湾フォーラムに参加した。午前中はバスで野島園臨港緑地から十三干潟、淀川大堰、毛馬閘門、城北ワンドを見学。参加者数66名でバス2台。やはり水辺の自然環境に興味を持たれている人は多い。昼食時には大阪市漁業協同組合から、べっこうしじみの味噌汁といかなごのくぎ煮が提供される。

午後からは、前滋賀県知事の嘉田由紀子氏の「生活者目線で大阪湾の再生を目指そう」講演があり、大阪湾と琵琶湖を結ぶ各河川のボランティア団体の活動報告、揖善継氏「うなぎの目線で海と川を考える」などが開催された。



今後の河川管理には官民一体で取り組むことが生物の多様性を考える上で必要であると再確認した。（物部）



報告3

第19回 JOFI 大阪定時総会 (H27-3/29)

変革のある新しい時代にどのようにすれば釣り文化を継承しているのか、どのような方向に進めばよいのか。「第19回定時総会」が3月29日堺市産業振興センターで開催。来田代表の挨拶ではじまり、議長に山崎勝彦氏を選出して議事を開始。第一号議案の「H26年度事業報告」では、本部事業や個別事業などに757名にもなった状況。広報誌の発行とホームページへの訪問回数が報告された。第五号議案として「支部名と組織変更」が提出され、すべて満場一致で了承された。ほかに「会員の増員」などを話し合い、本年度の活動を成果のある展開としていくことを誓い終了した。（物部）



報告4

ゴールデンウィーク釣り指導&魚拓教室 (H27-5/4~5)

「大阪南港魚釣り園護岸」では毎年恒例の魚拓教室を開催。4日はあいにくの雨でしたが、子供の日の5日は天気も良く、午前中に391名の来園者がありましたが、相変わらずアジやイワシの回遊もなく、釣果も芳しくありません。胴付き仕掛けのサグリ釣りの指導をしましたが結果は変わりませんでした。魚拓教室では、ハゼ20.2cm、アブラメの新子9cm、ヒトデなどの魚拓依頼があり、来園者と楽しい一日を過ごしました。なお、インストラクターによる魚つり園護岸での釣り指導は毎週日曜日に継続実施中（午前中巡回指導。時々休みあり）、魚拓教室は月に1回日曜日に不定期開催しています。（辻）



春のみらい園のぞみ園釣り教室 (H27-5/17)

前日の雨が上がり、よく晴れてニジマス釣り教室には最高の日になりました。9時すぎに、大阪市立弘済みらい園とのぞみ園の子供たちが千早川ニジマス釣り場に到着。魚のことと、ルール・マナーについて一通りお話してから実釣に入りました。全員にニジマスが

釣れ、多い人は19匹も釣りました。料理系のインストラクターは釣ったニジマスの塩焼きと唐揚げをつくります。塩焼きは備長炭で焼いたので香ばしく、唐揚げも負けず美味しかったです。(石川)



第8回大阪湾生き物一斉調査 (H27-5/31)

5月31日、堺2区生物共生型護岸に生き物一斉調査を実施。今年は6年目です。この場所の調査の特色は「釣りによる調査」を実施していることです。今回も早朝より9時ごろまで調査をしました。エビ撒き釣りで、ハネ45~63cm12匹、キビレ35cm2匹が釣れました。現場の水質調査も行いました。水温は表層で23℃、底4.3mで22℃です。塩分濃度は表層が12‰、底層が27‰。DO値は7mg/l。緑っぽい水の色。透明度1m。気温は24℃、北西の風でした。

手での採取による調査の参加者は10時ごろに到着。場所の特徴、採取の方法、今回のテーマ生物「ヤドカリ」について説明をしてから干潟に入ります。

魚類ではマコガレイ、ヒメハゼ、ムラソイ、ボラ、ヒモハゼ。カニ類ではタカノケフサイソガニ。貝類ではコウロエンヒバリガイ、ヤマトシジミ。エビ類ではユビナガスジエビ、ヨコエビなど。小さな干潟で、種類は多くはありませんが、いろんな生物が生息していることが分かりました。ヤドカリは1種でしたが、この場所で調査を始めた時からすれば量的にはかなり多くなりました。

大阪湾生き物一斉調査の調査結果は、学術的な検証をした上で、大阪湾環境データベースに発表されます。この調査が大阪湾の自然再生、干潟造成、市民へのフィールド解放などにつながることを願っています。(萱間)



報告7

キジハタ稚魚放流と環境学習会 (H27-6/13)

6月13日、尾崎にて「キジハタ稚魚放流と環境学習会」を実施しました。キジハタ稚魚は10cmサイズで約3000尾。小型を1万尾購入して育てたものです。朝10時、尾崎漁協の船に積み込みます。酸素を切らさないように注意して、尾崎、西鳥取、下荘の沖合に魚礁付近に放流。岸からの放流体験は、学童保育のみなさんと一般のご家族の参加があり、バケツでスロープから放流しました。

放流のあとは「環境学習会」です。阪南市には大阪湾では少なくなった干潟があり、貴重な生き物がたくさん住んでいます。この浅い海があるから、エサが育ち、大阪湾が元気でいられるということを、理屈ではなくて体験として知っていただくことが目的です。講師は、男里川干潟を守る会の田中正視先生。子供の頃から泉南の海を見て、

生物と遊んで来られて、そのお話を聞くだけでも貴重な機会です。

干潟にはたくさんの穴が空いています。掘ればバカガイが出てきました。マテガイの貝殻もあります。生きたヒトデ、カニ、ヤドカリはたくさんいます。不思議な物体は砂じゃわん、ツメタガイのたまごです。モンブランのような砂模様はタマシキゴカイの排泄した砂です。魚ではヒメハゼ、ドロメ、クジメ、マコガレイ、アカエイなどが採れました。ニホンスナモグリもいました。海藻はワカメ、ヒジキ、アナアオサ、そしてアマモが生えていました。

「みんな、この砂をよく覚えておいてや、これが大阪湾の砂やで。細かいやろ。この砂が大事やねん」と田中先生。見て、触って、感じる事ができた環境学習会でした。



報告8

マコガレイ稚魚放流・釣りによる調査会 (H27-6/18、7/11)

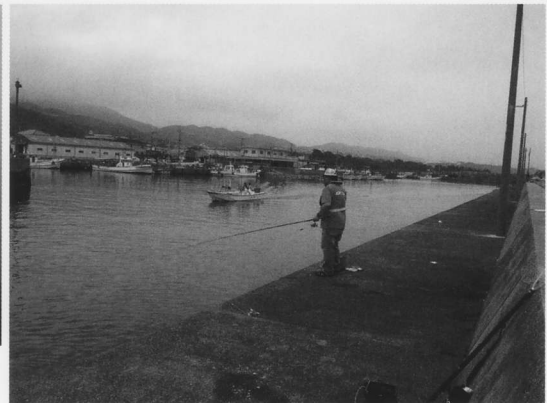
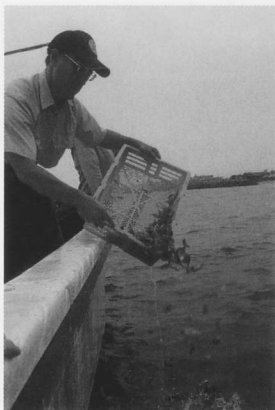
6月18日、阪南市沖にマコガレイ稚魚1万尾を放流しました。マコガレイ飼育水槽の状態から判断して、早めの放流をお願いしたいとの連絡がありましたので予定を早めて放流しました。

7月11日、水産多面的事業による種苗放流が、実際に資源回復に効果を上げているのか調べるため、釣りによる調査を実施しました。

今回の調査は、基本的に小さな魚は写真を撮ってリリースという

ことで実施しました。「食べる」ということも釣りの楽しみのひとつですが、「リリースする」という行為の上で成り立っていることを、多くの釣り人や漁業者に伝わればと思います。

当日の調査ですが、残念ながらキジハタは釣れませんでした。「まだ釣れる状況ではない」という結果ですが、調査員の方々に継続の調査をお願いしておきました。



※アマモ場保全事業、漂着物回収事業、漁村文化継承事業は秋に実施！ 参加者募集中です▶協議会サイト <http://osaka-yutakanaumi.org> をご覧ください！